『観経疏』（「散善義」）における「抑止門」釈をめぐって：善導から親鸞へ

宮島, 磨
九州大学人文科学研究院：助教授：倫理学

Miyajima, Osamu
Faculty of Humanities, Kyushu University: Assistant professor

https://doi.org/10.15017/1434417
観経疏
（散善義）における「抑止門」釈をめぐって

宮島
磨

「観経疏」（「散善義」）における「抑止門」釈をめぐって

周知のように「無量寿経」（以下、「大経」と略記）に説かれる阿弥陀仏の四十八願の中でもとりわけ第十八願は仏の智恵と慈悲が結晶した誓願として、日本の浄土教においてひとびとの浄土願心のようところとなってきている。しかしながら、四十八願はその全体にわたって、仏に帰依する者を必ずや阿弥陀仏の浄土へと救いとされるべきことと誓われているにもかかわらず、その中核ともみなされるこの第十八願だけに一種の除外規定とでもいうべき「但し書き」（「唯だ五逆と誹謗正法を除く。」）無量寿経：第十八願）を除くことさえも避けられている点が古来、浄土教の注釈家たちによって論議の対象となってきた。

焦点は、「大経」とともに、いわゆる浄土三経を構成する「観無量寿経」（以下、「観経」と略記）の「九品往生」段において
「下品下生」といえば、或は衆生有りて、不善業の五逆・十悪を作り、諸の不善を具せず。此の如きの愚人、悪業を以て故に応に悪道に堕し、多劫を経歴して苦を受くること窮り無かるべし。此の如き愚人、命終る時に臨みて、善知識の種に安住して為に妙法を説き、教仏を念じて仏を称ふべしと。此の如く至心に声を出して絶へざらざめ、十念を具足して南無彌陀仏を称へし。仏の名を称ふるが故に、念々の中に於いて、八十億劫の生死の罪を除き、命終の時、金蓮華の、なお日輪の如くして、その人の前に住するを見ん。一念の項の如くに、即ち極楽世界に往生することを得……。

観経によれば「不善業」たる「五逆・十悪」を為したがために、悪道に堕ちて苦を受けることが必定である「愚人」であつても、臨終の際に亦し、苦しみのあまり「観念仏」一般がかなわないとしても、善知識の嘆きを得て、「至心」に「十念を具足した」かたちで阿弥陀仏の名を称えることによって、「八十億劫の生死の罪」が除かれ浄土へと誘われてい

「抑止門」とは、こうした経文解釈上の難所について、中国浄土教の大成者である善導（六一三十八）がほどこした解

釈をさす。
『観経疏』（『散善義』）における「抑止門」釈をめぐって

この義にいて抑止門の中にある解する。四十八願の中に此の義を、諸法と五逆を除くことは、しかるにこの二法、その障り
極重なり。衆生もし造れば、直ちに阿鼻に入る歴劫経QPushButtonを出づべきに無だ。ただ如来、それこの二つを造らむ
善導によれば、弥陀が「五逆」と「諸法」とを除くとしたのは、此の二つを造れば、生業にあたって著しの障礙なる（そ
の障り極重）。からであって、決してこれらの衆生が見捨てるので願みられて居らざるわけではない。

また、『観経疏』（下品下生）においては「諸法」が説かれる場合であっても弥陀は決してその「諸法」の者を願みないわけではない。

それらを制すすべく説かれた「未造業」である（したがって、捨てて流転せしむべからず。）。更に若者を発
品下生者によって「未造業」すでに為すべき行い「未造業」の方は、いまだ為されていない行い「未造業」であるがために、

この道は開かれる（もしご造れば、還って帰って生を得む）とみなされているのである。

つまり善導によれば「未造業」のいうそれぞれ経文に表された仏意があるのであって、ひとたび「罪」を犯した場合にあっては
それが「罪」の重さにもかかわらず、それらの者もまた「摂取」されるのだと解釈されているのである。

「観経疏」（散善義）

— 25 —
て、多劫ひらくとへども、阿鼻地獄の中にして、長時永劫に諸の苦痛を受けぬに、勝れざるべしや。

これを、いわゆる「化土」への往生を述べた文章であって、少なくとも善導はこれらの往生者は決して十全な往生形態をとるものではないと一概に解しているのである。実際、十八願文を自体の中でこそ読まれてはいないものの一覧の下品下生段においては、往生後なお「十二大劫」という長きにわたって蓮華の内に包まれた状態が続くとされていのあるのである。

往生者は蓮華の華の内につまったまま長い長い年月を過ごす。右の中略部分において善導は、この「化土」往生が決して十全の往生ではない事由を、これも経文にもとづいて①仏や聖衆にままれるかぎり、この業によって堕ち行くべき、地獄の如苦しみみから解放されているただしそれを添えてもいるのである。

他に浄土の仏・菩薩を供養することはできない、といった三つの点にあるとしているが、もしかなければおそらく「五逆・誹法」の者が自らの犯した罪に対して、その後にどのような姿勢をとるかにかが差し伸ばれるという理解はいささか奇妙にも思われる。善導自身は以上のように述べてひとまずは『散善義』において「抑止門」釈の件を終えているのであるが、直ちに思わぬ仏の教えに差し伸ばれるという理解はいささか奇妙に思われる。
『観経疏』（『散善義』）における『抑止門』釈をめぐって
そこで善導はしばしば「懺悔」の重要性を語ってゐるが、中でも「往生礼讃に説かれる「三品懺悔」は熾烈をきわめており、その特質をよく表している。

懺悔に三品あり。上中下なり。上品の懺悔とは、身の毛孔の中より血流れ、眼の中より血出する者を、上品の懺悔と名づく。中品の懺悔とは、遍身に懺悔を繰り返す者を、中品の懺悔と名づく。善根を種える者を、善根を種える者と名づく。これら三品、差別ありと雖も、これにくし般解脱分の

三宝師僧父母、六親眷属、善知識・法界の衆生に対する「殺害」、「偷盗」、「邪心」、「妄語」、「綺語」、「惡口」等の「罪」であり、また諸戒を破り、大方大地の無辺に微塵無数なる如き、衆生を凌がした「罪」であるという。

またこれに先立つ箇所では、「懺悔」なき者の様子が煩悩ゆえのこととして描き出されただうえで、あらためて「罪深き己を懺懺」することを求められてもいる。

もし専を捨てて雑業を修せんとする者は、百の時に希に一二を得、千の時に稀に三五を得。何を以ての故に。いまま雑縁を労動して、正念を失するに由るか故に、仏の本願と相応せざる故に、教と相違せざる故に、仏語に順ざざる故に、仏尾
『観経疏』（「散善義」）における「抑止門」のりをめぐって

念相续させざる故に、憶想間断する故に、回頭懸重実ならない故に、貪裏諸見の煩悩来り間断する故に、懇懐懶

意業の造の所の十悪・五逆・四重・誹法・闘提等の罪を今生の生において「懇懐」することができるのは、右の引用箇所では、「誹法」乱動等といいたる、仏の本願教相違せるありよりうそのものの懇懐・懶心あることなき故に懇懐に三品有り。一は要、二は略、三は広、下に具に説くが如し。意に随て用ひに皆得たり。
と導くものと解されているのではあるまいが。

ところで、まさに『法事讃』において『誹法・闘提』心すれはみなゆく」と述べられていたように、『闘心』こそが真の往生への要件であるとすれば、ことなる五六・『誹法』の者にとどまらず、『闘提』すなわち仏道からもっとも縁遠存在にあるなら、『十悪・五逆・四重・誹法・闘提等』といった差違相は相対化させられてしまうであろう。いうなればおのぞ衆生が衆生である限りにおいて、仏になるための根本条件としての『闘心』こそがここlectにおいて求められているものなのである。であるならば、『行説』、『誹法』を翻って、抑止門釈において善導をつよく継承する親鸞が『教行信証』（信巻）において次のように語るゆえんである。

『抑止門』釈において善導をつよく継承する親鸞が『教行信証』（信巻）において次のように語るゆえんである。

金剛不壞の真心を求念すべし。本願開醸の妙藥を執持すべきなりと。
『観経疏』（「散善義」）における「抑止門」釈をめぐって

阿弥陀仏の誓願は「五逆」・「讎法」・「闇提」の者といった仏道からきわめて遠い存在（難化の三機）すらをもその対象からもどすまいとの誓意を含んでいるのだが、そうした阿弥陀仏の「大悲」の心を果たしたいうえでのこと、すなわち阿弥陀仏の「大悲」を果たしたいうえでのことと解されるのであろう。それゆえにこそ、何よりも「金剛不坏の真心」すなわち阿弥陀仏への十全な信が求められているのである。

قم recto
すなわち「大経」第十八願には「五逆」と「誹謗正法」の「二種の罪」が説かれているのに対して、「観経」には「十悪・五逆」の「罪」が説かれている。「観経」では、「五逆等」の「罪」は説かれていないが、「誹謗正法」は説かれていないのであるから、「十悪・五逆等」の者は「正法を誹謗させる」という。「観経」において仏法を蔑ろにする者は少しは浄土を願生しているようにみえることがある。「観経」（下品下生段）においてその往生が説かれている「十善・五逆等」の者にせよ、浄土にいきわる者として、彼が往生するほどの善知識の導きを得て、名号を称える機会に恵まれ、「無量寿の開花」に要する「十二大劫」という時間に、「十念」の念仏を称え続けることで、彼が見れば「罪」の「償」いといった内容には独自の理解が取り込まれている可能性があるせよ。時間があれば、「五逆」者に「迦心」が求められていることは確かであり、したがって「誹謗正法」者が往生し得ないのも、「何を仏の法
『観経疏』（「散善義」）における「抑止門」釈をめぐって

そのものと接点をもととうしないのであるから当然のことである。

<table>
<thead>
<tr>
<th>先の観経からみた相関性</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>行者のものをの結果に入れたがり、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、我が身をたのみ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>五</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>本の自然な「自力」とは、行者のものをの結果に入れたがり、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、我が身をたのみ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

 |

また自力とはふるることは、行者のものをの結果に入れたがり、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、我が身をたのみ

 |

えねるは、または「大綱」所説の「無上菩提心」に即しつつ、かの安楽浄土に生ぜんと願する者は、かなならず無上菩提心を発
すに往生を得ざるべきなり。 |
わがはかかるひこをくって、身口意のみだれこころをつくろひ、めでたうしなって浄土へ往生せんとおもふを自力とま

ふすなり。

ここでは阿弥陀仏以外の仏の名を称えたり、称名以外の諸行を行じようとする姿勢の背後にひそむ「自力」が問われてい
る。行者は己れの行じる諸行が浄土往生に際して何どかの力を持ちうると思いなしているという意味において、わが身を
たのみ」としているのである。こうした「自力」をたのみとする行者は阿弥陀仏の智恵（と慈心）とを疑惑する存在である
ことから「仏智疑惑」者とされ、それゆえに。「疑城胎宮」（という「化土」）への往生にとどまると疑聴はいう。そして「化
土」往生者の不如意なるさまを描き出す著心の筆遣は「内容的には善導の理解と軌を一にしつつも」、いっそう重苦しい
罪福信する行者は「仏智の不思議をうたがひて疑城胎宮にとどまれば、三宝にはなれたるまつる」／「本願疑惑の行者には、寺未曾出のひともあり」／「弥陀の本願信じぬれば、疑惑を帯してむまれつつ、はなはだしつらはじけねば、胎に処するたへたり

とすれど、証諦正法をもふ。端的に仏に背を向けている衆生のみなず、一見すると仏道を行じているように見せながら、すらもしそうのうちに「外道」へおもむいているありかを指してゐるのである。すなわち、証法とは「仏道に邁進している」と「自力」を摂いきて、一見すると仏道を行じているように見せながら、すらもしそうのうちに仏への志を歪められて
『観経疏』（仏散善義）における「抑止門」釈をめぐって

いくといった事態こそが、憂べべき問題だったのである。

仏「抑止」はしたがって、このような行者に、「楽」への志向、ないし「貪」といった煩悩に起因するありょうと絶縁
しれないゆえに発動する「自力」の残滓の点検を迫っていえるとみなすべきであろう。「証得涅槃」への志向ならざる
浄土願生心の「抑止」を求める仏意は、おそらく「往生手段」としての「易行」という言葉にまとまるようなたたちの思いな
しとは裏腹に、きびしく、そして重い。問われているのは志向それ自体の内実にかかわる事柄だからである。「教行信証」総
雑疑問への懸問がされている。なるほど善導においても、「下品下生者」についても「無始已来」という観点の
中において受けとめられているのである。

親鸞は、善導の「三品懺悔」を念頭においてのことであろう。「仏智うがふみふかし／この心もふしぃれば／くゆ
るつるをぬねとして／仏智の不思議をのむむべし」と詠っている。「自力」の心を脱し、阿弥陀仏の誓願への「信」へと開かれていくことを念じてやまないのである。

善導の「抑止」をめぐる一連の思惟は、このように親鸞を「他ならぬ己れにかかわる事柄としての「自力」の再吟味や、
さらなる「化土」の構想、ひいては「教行信証」における「懸問」釈といった独特の経文理解へと導いていったのである。

— 35 —
注

（1）「如来会」では「唯だ道無間悪業と、正法および諸聖人の説説せむとを除く」

（2）「十善」、「四逆」は一般的にはそれぞれ「殺生・盗賊・邪淫・妄語・両舌・悪口」締語・貪欲・瞋恚・邪見」、「害母・害父・害兄・害弟・害子・害父・害母」

（3）大正蔵三十七・二七七 a

善導のテキストからの引用は大正新修大蔵経により巻数・頁数等を示した。
なお、訓読みにあたっては親鸞注解本（法蔵館）をはじめ、諸本を参照した。

（4）以下、大正蔵三十七・二七七 b

本善導聖人全集に所収。をはじめ、諸本を参照した。

（5）すでに犯した「罪」（已道染）に関して善導が述べる件は「抑止門」に対して宗にある「撰取」を実行している。

（6）すでに犯した「罪」（已道染）に関して善導が述べる件は「抑止門」に対して宗にある「撰取」を実行している。
『観経疏』（「散善義」）における「抑止門」釈をめぐって

（6）

大経（胎化段）では「宮殿」、源信『往生要集』に引かれる『菩薩臓胎経』、穏感『群疑論』からの引用では「辺地懸慢等

もし衆生ありて、疑惑心を以て諸の功德を修じて、かの国に生ぜんと願ず。仏智・不思議智・不可称智・大乗広智・無等無倫最上
勝智を了らずして、此の諸智において疑惑して信ぜず。心もは非仏智を信じて、善法を修習して、その国に生ぜんと願ず。この
諸の衆生、かの宮殿に生れて寿五百歳、常に仏を見たてまつらず、経法を聞かず、菩薩・声聞聖衆を見ず。この故にかの国土に
これを胎生と謂ふ。……仏智を疑惑する以ての故に、かの宮殿に生ず。刑罰乃至、一念の悪事あることなし。但し五百歳の中
仏の所に従仏して恭敬供養せん。また遍く無量無数の諸余の仏の所在に至ることを得て、諸の功德を修せん。（大経、胎化段）

問ふ。「菩薩臓胎経」の第二に読かく。「西方此の間浮提を去ること十二億那他に懸慢界あり。国土快楽にして、倡伎楽を作す。衣被・服飾・香花もて莊厳され。七宝の軒開する床あり。目を挙げて東を視んとす。前後して意を発せる衆生、阿弥陀仏国に生まれて欲する者皆懸慢国土に着して、前に進むと
阿弥陀仏国に生まれること得べきこと難かと答ふ。「群疑論」に、善導和尚の前の文を引きてこの難を訳し、これと答ふ。分の楽ありというほど、猶しかの処を乗らず。

下に細言を題く。「何を読めてゆくに、みな懸慢にして、執心牢固なるなり。勿論懸慢せずに整らぬ業を行にせば、これ貴さならず執心牢固にして、定んで懸慢国土に着して、前に進む
人に生まれし。乃至、まつ報の浄土なし生存は極めて少し。この経をもって唯ざるに、懸慢を見るることを得べきこと難かと難かと答ふ。善導和尚の前の文を引きてこの難を訳し、これと答ふ。分の楽ありというほど、猶しかの処を乗らず。

大経（胎化段）および『菩薩臓胎経』は、もとより『観経』（下品下生段）とは成立上の直接的な関連をもつものではないが、
『観経疏』（『散善義』）における「抑止門」釈をめぐって

第13節
例えば「般若経」（大正蔵 四七巻四五〇 a）、において「行住坐臥に専ら念仏」することを説かれるように念仏の時に常に懺悔

第14節
真実を忘して苦の姿勢を厭い、楽の無為を欣む」と述べた例（「観経疏」（序分親））に於いて述べ終えた後で、「あらゆる善導は、八品妙に死生の罪を減ず」と対応する善導の言葉を「仏門に於て、仏教の本願への信をよびます」という意義をなしてよい（三枝慎隆「善導系説の研究」東方出版 一〇一〇二〇一〇〇頁参照）。

第15節
「未造」の者に対して「誹謗正法を抑止すること」、「自力」修行への志向もまた、「見返り」との形ではあれ、この「罪」の懺悔を求めることが「後見の九品をす

『信説』（第一巻 十三四頁）

『觀音の著作からの引用』は法華館『定本親鸞聖人全集』に示し、巻数・頁数等を示した。
教行信証にいってこの箇所は『涅槃経』所説の『阿闍世王』説話が長きにわたって引き括られた所である。『現有仏性』を経説の柱とする『涅槃経』において、どういった理路において『難化の三機』が説き出され、また仏法へと収められていくかは経説の全体構造に即して考察される必要があるが、ひとまず本稿の趣旨からすれば、この『阿闍世』説話も、父である曽我沙羅王殺害という『五逆』の罪を犯した王子が、その罪を悔い、仏の教へ帰依していく様が描かれているとみることができる。

『涅槃経』によれば、療治したのである『誇大乗』、『五逆罪』、『闇提』も、仏・菩薩に従ってその治療法を聞き終えれば、よく阿闍多羅三藐三菩提心を発し、説法を初めで悩むべき外道の心を勧め、それを訙説正法、または仏教を心に向かふ。……。何れにおいても、多くの阿闍世は直接的な意味で『誇大乗』、『五逆罪』、『闇提』をと『三病』と一括にしていると、上、信証に示す通り、この説示に基づいて五逆のうちには『誇大乗』、『五逆罪』を説く中で、その五として、説示して因果、長夜中に不善業行するのを提起し、『五逆』を仏法に準じて説示した。
『観経疏』（「散善義」）における「抑止門」釈をめぐって

大正蔵 四〇八三四 Eight

21 大正 蔵 四〇八三四

21 二念相続相の調相を基本とするが、『ただの阿弥陀仏を観念して、もしは思惟相を別相、所願の霊に随じて心に他相なくして、

22 十念相続する」という観相を基本とするが、『ただの名号を称することもまたまたかずの如し』というように称名念仏という

23 如来の本願の為に住持せる所にて受業無間なり」と述べているところにも明らかである。

24 本願の求める次元のそれと相違を異にする純粋性を帯びるかぎりに、『無上菩提心』の発起が求められているのである。
しかしあり得ない様が「仮相」、「雑相」といった文言でもって語られている。「真実心」の捉え方には、しばしば指摘されるよう

「善導」がそれを非対称の側にある者を決めず、それをやることではなく、成功に努めている。善導の心は、あるいは「自力」を貫徹し得ない。「自力」行者のありさまを描き出すその視点に

は共通のものがある。さらに先の「三品帰欣」文における「もしかの如くせば、たとえ日休在韓時、急に走れども楽てこれ

を解る。若しくは、善導の「河白道書」をめぐる理解に収めることができる。摘稿「善導」、「観無量寿経疏」における「河白道書」を

第五巻のしろしには／この世の道義ごとを／外儀は仏法の知恵に／内心道を帰敬せり／正信末和諷讃篇に

あり。これらの是はひとえに自力を募のものなり。（一念多念文意（第三巻和文篇に）

第１巻七

この点は善導の「河白道書」をめぐることに因み、幡の住ます、「自力」行者の内にある、「自力」の「受身」としての、「化士」という。「自力道者」を示すことが必要である。宝床

毎に従じ、北を視、西を視、南を視、それらの如く転ず、といった方法に多くの満足の一の極点の一注目すべきであ

る。
『観経疏』（「散善義」）における「抑止門」釈をめぐって

から「一切の外は九十五種を学ぶて、みな悪道に赴く」「善導、『法事論』から、九十五種みな世を汚す。ただ仏の一法のみ独り清

闇なりを引いた後にな、よく知られた悲願文（誠に知りぬ。悲しきか、愚弱鷹、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷感して、

叙述の仕方に留意するならば、この悲願文は決して唐突に漏らされた肉声などではないことは明らかであろう。仏心たる「自力

において他の経典論釈と並んで、明らかべき位置に置かれているとみなされるべきであろう。

（30）「正像了和讃」（第二巻 和讃篇 一九頁）

なお、観想においては善導の「真心」は阿弥陀仏に対する十念な（信）「真実心」の謂と受けとめられている。つまり「懺悔

はまさに「真実心」の獲得と相即していてもろのである。「真心に到達するひとは／金剛の心なりければ／三品の懺悔するものと／

ひとしと宗師（善導）はのたまへり」（浄土高僧和讃」第二巻 和讃篇 一四頁）

（本学人文科学研究院仏教学助教授・倫理学）